土　岐　市　教　育　研　究　所
Ｔ　Ｅ　Ｌ　0572-54-1111　(内 281)
Ｆ　Ａ　Ｘ　0572-55-6310
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kyoiku@city.toki.lg.jp
所　報　Ｎｏ．５３２
発行責任者　所　長　本 多　直 也
発　行　日　平成２９年　３月１４日
題　　字　山田　恭正　教育長

『心を　つに　出すぞ新記録！』
大縄記録会
撮影者　肥田小学校
星野　寿美子　先生

プリウス

土岐市教育研究所長　　本 多　直 也

トヨタ自動車は、ハイブリッド車の累計販売台数が1000万台を突破したと発表した。1997年12月にHV「プリウス」を発売してから19年あまりでの1000万台達成となった。（日本経済新聞 2017/2/14）

いまや、ハイブリッド車＝エコカーと印象づける、環境に優しい車の話題です。すっかり定着した【ハイブリッド（Hybrid）】という言葉。その意味は、「異なった要素を混ぜ合わせたもの・組み合わせたもの」だそうです。すなわち、「ガソリン」と「電気」の異なった力を利用して走る車だから「ハイブリッド車」と呼ばれています。そして通常走行中には発電機を駆動させて発電させたり、ブレーキを踏んだ際は減速のエネルギーを電池に充電したりして効率的に車を動かしています。

新しい学習指導要領の告示を前に、「カリキュラム・マネジメント」ということがよく聞かれます。文部科学省ではそのとらえの一つに、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。」をあげています。肥大化する学習内容について、効率的に進めることの取組を示唆しています。

目的地到着のために、ガソリンだけでなく、電気も一緒に使い、無駄のないようにエネルギーを回収する。この方法を教室で取り入れるとするならば、年間の教科指導の中で、内容的に近い教材の位置づけを考え、双方で学んだことを生かし合う、学習の組織化の工夫です。小学校２年生国語科での、「かんさつ名人に　なろう」と生活科の「大きく　なあれ　わたしの　野さい」を関連づけ、指導時期も含め意図的に行う、まさにカリキュラムの「ハイブリッド化」ではないでしょうか。

今日もプリウスαに乗ると、時代にあった指導方法は何なのかと問いかけてくれます。

教職大学院での学び

土岐市立泉中学校　早瀬　浩孝

今年度４月から岐阜大学教職大学院で大学院生として学んでいます。教職大学院での学びについて私が感じたのは次の３つです。

まず、学ぶ側の視点に立ち返ることができたことです。９０分の講義を久しぶりに受けることになりました。講義ではほとんどがずっと座った状態です。硬い木の椅子に９０分座り続けるだけでは、集中力の持続が難しく苦痛だと感じることもあります。普段の学校の授業でも子ども達も同じように苦痛に感じることがあるのではないかと思いました。自分の授業でもそういう状態になっていたことがあるのだろうなあと思い返しました。しかし、ずっと話を聞くだけの講義でも、集中力が持続する場合もあります。その先生のもつ緊張感、リズム感、リズムの変化、問いかけ、それらが聞く人の集中力につながっているようにも思いました。また、レポートの課題も明確であるほどペンがすすみます。何を書けばよいのかわからない課題は頭が混乱してしまいます。子ども達の姿（集中度、発言内容、記述内容）の中に授業改善のヒントが多くあることをあらためて感じました。

２つ目は、教師同士の「対話」による高め合いの重要性です。教職大学院には小、中、高、特別支援学校の先生と大学卒業後すぐに大学院に進学した学生が在籍しています。校種、年齢も異なる集団ですが、講義中の討議を重ねることで、共に学ぶ仲間としての意識が高まってきました。何の関係性もない見知らぬ人から、仲間への意識の変化はなぜ起こったのか。同じ空間にいても関係は変わりませんが、対話を通して人となりを知り、関係を構築できたのだと思います。対話は、講義での話し合いなどのフォーマルな対話と、それ以外の場でのインフォーマルな対話の両面から成り立っています。学級経営においても、子どもたちが単なる集合体から、学級目標を共有し目標に向かう仲間関係を構築するのか、また、教師同士の関係においても、学年教師集団、学校の職員集団がどのように協働的な人間関係を構築するのかというヒントに「対話」があるように感じました。

３つ目は、視野を広げることです。教職大学院で一番驚いたのは、自分の身分が本当に学生であるということです。自分がかつて大学生だったころと同様に、講義はすべてのコマが埋まっているわけではなく、空いている時間が多いのです。学校現場では日々時間に追われるのが日常ですが、学生は時間をどのように使うのかを考える余裕があります。しかし、何もしなければ、何もないまま終わってしまいます。そのため、本や先行研究を読んだり、県外の研究発表会に足を運んだりしました。また、普段あまり見ていなかったテレビ番組や映画も観ました。学校現場では非常に狭い範囲の中で仕事をしています。何年もそうした環境で過ごしていると、専門性が高まる反面、狭く偏りのある見方に陥っている可能性があります。世間一般の感覚から見てどうであるのか、客観的に見てどうであるのか、これまでとは違った専門的な視点で考えるとどうなのか、他市、他県や世界の動向と比較してどうなのか、自分自身の視野を広げて教育観を再構築することで、新たな発想につながると感じました。

今、学習指導要領が改訂間近となっています。大学院に入学してすぐに様々な用語が耳に入ってきました。キーコンピテンシー、アクティブラーニング、パフォーマンス評価、カリキュラムマネジメント、コミュニティースクール等次から次へとよくわからない単語を聞き混乱し不安を感じました。状況が大きく変化するタイミングに教職大学院で学べたことは、自分自身の学び直しと今後の教育について考える非常に良い機会となっています。来年度は学校現場に戻り研究実践開発をすすめます。教職大学院での学びを少しでも還元できればと思います。

平成２８年度「学力向上計画訪問」の実践紹介　　土岐市立濃南中学校

Ⅰ　学力分析などによる生徒の実態

本校の調査結果は国語・数学ともにほぼ県・全国平均水準であったものの、少人数学級（３年生２２名）であることを考えると、十分な結果とは言えなかった。そこで国語・数学の詳細な分析に加え、「生徒質問紙」のいくつかに注目し、調査結果との関連性を明らかにすることで、学力向上の手立てを探ることとした。

学校生活や授業については、

「学校に行くのは楽しい？」楽しい：90.9%　「学校で友達に会うのは楽しい？」楽しい 100%
「国語の勉強は好き？」好き 95.5%　「国語の授業はよく分かる？」分かる 100%
「数学の勉強は好き？」好き 72.7%　「数学の授業はよく分かる？」分かる 77.3%

この他、家庭学習の時間や授業の復習など、県・全国と比べても高い結果であった。にもかかわらず調査結果は県・全国平均にとどまっている。そこで、授業の内容に関わる質問に注目した。

「授業の中で目標が示されていた？」示されていた 90.9%
「授業最後に学習内容を振り返る活動を行っていた？」行っていた 77.3%

授業の明確な課題提示や終末の学習評価には、力を入れて取り組んできたつもりであったが、生徒の実態とはずいぶん開きがあることがわかった。授業内容を分かったつもりで済ませてしまっている生徒。そしてわかっているだろうという甘い捉えをしていた教師。この点を解消することが学力向上につながるはずだと考え、今年度改めて授業の終末、つまり「定着状況の確かな見届け」を重点に置き、校内の研究推進とも一体となって学力向上の取組を進めてきた。

Ⅱ　学力向上の重点

（小中合同研究会の様子）

今年度の学力向上の柱は次の四つ。

①授業改善（定着状況の確かな見届け）
②家庭との連携（休日の過ごし方の見直し）
③下位層の底上げと上位層のさらなる伸び（補充的学習の模索）
④小中連携（９カ年を通した児童生徒の育成）

これらを重点として取り組んできたが、④の小中連携については、この濃南校区の大きな課題であり、今年度より情報の共有・校内研究内容の一本化・小中合同の授業研究会などの連携を深めてきている。また、指導改善プランも小中統一のものを作成するなど、９カ年を見据えた学力向上の取組が始まっている。

Ⅲ　学力向上計画訪問の視点と具体的な指導・援助の手立て

定着状況の確かな見届けの手立てとして、授業終末に本時のねらいが身に付いたかどうかを確かめる時間を確実に設けることとした。７月の国語科、１０月の社会科では終末に「評価問題」を実施し、ねらいが身に付いたかどうかを生徒も教師も把握できる手立てを行った。校内研究において、学習内容やねらいによって定着状況の見届けの方法も様々であると考え、１２月の学力向上計画訪問の英語の授業では「書く」ことで定着状況を見届ける方法を選択し、その有効性を授業研究の視点とした。

（定着状況見届けの様子）

また、本校では生徒どうしが学び合う「濃南タイム」を実施している。実態の見届け及び学習状況の見届けなどの場面において、ペアやグループで学び合う「濃南タイム」が必然性をもって有効に働いたのかどうかも併せて授業研究の視点とした。この点においてご指導をいただき、研究の方向もより明確になった。

Ⅳ　成果と課題

○定着状況の確かな見届けを中心とする指導改善の方向性が明確になってきた。
○「濃南タイム」の有効性を確認し、ねらいを達成するための必然性のある活動として研究が進んだ。
△全国学力状況調査の結果分析や校内研究をすべての教科で取り組む確かな実践を積み重ねていきたい。
△小中連携の深まりを来年度以降も継続して行っていくことで、濃南校区の大きな特色としたい。
△学力向上訪問の際にご指導いただいた、「生徒自らが主体的に学び合い、生徒自らが定着状況を正しく把握できる」ための手立てを、今後とも全職員で追究していきたい。

平成２８年度　学力向上推進委員会活動報告

推進していこう！全職員『共通理解』『共通指導』

1　平成２８年度学力向上推進委員会を終えて

今年度の学力向上推進委員会は、昨年度の研修で明確になった学力向上の大きなポイント、『共通理解』『共通指導』をキーワードに各学校で指導改善が推進されるよう、計画・実施しました。『共通理解』は「どのように」図るか、『共通指導』は「何を」重点として取り組んでいくのかをキーワードに交流・検討を重ねてきました。その中で、市内の実態が明らかになると同時に、市内の先生方が目指してみえた方向が明らかになりました。それは、日々の授業改善への取組の中で、知識・技能の定着、思考力・判断力・表現力の育成と同時に、その土台となる『主体的な学びの姿』を求めてきたということです。

２９年度は、学力向上に向けた授業改善の各校の取組を調査・把握・整理しながら、成果や課題、学力向上のために共通指導していく重点を探り、市内に広げ推進していくことができる会として位置づけていきたいと考えています。

2　平成２８年度　学力向上推進委員会の実施報告

回	月日・会場	活動内容
1	５月２６日(木) 土岐市 文化プラザ	・各校の授業改善推進に向けて①→**共通理解に向けた分析のしかたを学ぶ** 演習　全国学力・学習状況調査自校採点結果（土岐市集計分）の分析 （講師：県教育委員会学校支援課　課長補佐　遠藤　睦史） ４月の全学調の自校採点結果（土岐市集計分）より、正答率が低かった問題について分析を行った。正答率が低い原因を探る中で、実践的に分析の仕方を学んだ。
2	６月３０日(木) 土岐市 文化プラザ	・各校の授業改善推進に向けて②→**今年度の各校の取組の重点の交流・明確化** 授業改善・指導改善に向け、「共通理解」「共通指導」を図って校内で取り組んでいる重点を校区で交流する中で、校区の実態把握、自校の取組の明確化を行った。
3	８月２５日(木) 土岐市 文化プラザ	・学力向上計画訪問校の実践発表（土岐津小学校・泉小学校） ・各校の授業改善推進に向けて③→**1 学期（前期）の取組の校区間交流・成果と課題** 授業改善に向けて重点として取り組んできた実践について交流し、成果と２学期（後期）に向けての課題を明らかにした。また、指導改善に向けた日常的な取組について（補充的な学習・家庭学習　等）交流した。
4	１１月１６日（水） 土岐市 文化プラザ	・学力向上計画訪問校の実践発表（妻木小学校） ・各校の授業改善推進に向けて④→**全学調分析結果校区間交流による傾向把握** 平成２８年度全学調の土岐市分析結果について全委員で共有・傾向把握をした。その後、各校の分析結果を校区間で交流する中で、校区の実態や傾向を把握し、成果や課題（今後の重点）について確認した。
5	２月８日（水） 土岐市 文化プラザ	・学力向上計画訪問校の実践発表（肥田小学校・濃南中学校） ・各校の授業改善推進に向けて⑤→**全学調の結果からの具体的授業改善について学ぶ** 講話「全国学力学習状況調査の結果からの授業改善」 （講師：岐阜大学教育学部　教職大学院　准教授　吉村　嘉文） 全学調の課題について、関係していると思われる教科書の学習内容を事例に取り挙げ、そこで『大切にしたい指導・活動』を探った。「何を大切に指導すべきか」という見方や、指導改善の在り方、また校内研究の在り方について学んだ。

3　今年度各学校で大切にした児童・生徒の姿

主体的な学びの姿

①子どもが課題を明確にし、見通しをもって活動する。
②一人ひとりが自分の考えを明確にもつ。
③自分の思いや考えを表現する。（「分からない」が表出できる。）
＊仲間との学び合いの中で理解する。高まり、深まる。
④1時間で何ができたら〇かを子どもがつかみ、挑む。課題解決する。

「私の教育実践」

「仲 間 と 関 わ る」

駄知小学校　教諭　道下　直矢

学校には自分の感情をコントロールすることが苦手な生徒や、不適応によって不登校になる児童生徒がいます。そのような児童生徒が仲間と関わりながら自己の可能性を伸ばしていくことを願い、これまで取り組む中で感じたことは、中学校段階からの支援では思うような変容の姿が見られないということでした。

そこで、小学校段階からの支援が、将来の不適応を防ぐことになると考えて現在取り組み続けています。具体的には「１．仲間と関わる場を設定すること」「２．仲間との関わり方を教えること」「３．教師が自己の指導を振り返ること」です。

１．については、「構成的エンカウンター」や「よさ見つけ」を日々の生活の中で取り組んでいます。２．については、田中和代著の『アサーショントレーニング』を参考にして、自分も相手も大切にした声のかけ方を指導しています。仲間と関われば、意見の違いや言葉の掛け方によるトラブルが必ずといってよいほど起きます。そのような時の仲間との関わり方を、ロールプレイングなどを通して、考えさせています。３．については栗原慎二・井上弥　編著『アセスの使い方』を参考に、児童への支援の有効性を検証しています。「アセス」は調査を実施した日に結果が明らかになることから、機を逃すことなく児童を支援することができて大変に有効です。

仲間と関わり、認め合う関係を築く力を身に付けることができれば、小学校はもとより中学校における不適応の児童生徒が減少すると信じ、これからも実践を続けていきます。

「私の教育実践」

「私 の 二 刀 流」

土岐津中学校　教諭　北川　慎二

３０代から約１０年間、道徳の研究をしています。専門教科の社会以外にも自分自身に武器があることで教科経営と学級経営において大いに力を発揮することができています。社会と道徳で共通して大切にしていることが「自分自身の価値判断」です。困難な課題が多い将来を生き抜き、人と人とが生き合う社会を形成する人材を育てるためには、「答えのない問題に対しても自分の考えをもち続ける」ことは必要だと考えています。現在授業では、「自分だったらどうするか。なぜそうするのか。」と判断を問い、一人一人の行為や価値観の差異に生徒も教師も驚いたり、感心したりすることで感性を磨いています。社会の歴史学習では、本時に学習する時代の前の時代と現代とのつながりを考えてから、その時代の特色を調べたり考えたりしています。「鎌倉幕府のように滅亡しないために足利氏はどのような政権づくりをしたのだろうか。」「鎌倉仏教の考え方で自分の考え方に近いものはどれだろうか。」など、単なる調べ学習ではなく、考える授業になるように心がけています。特に40才になってから授業のアイディアが豊富に浮かぶようになりました。自己研鑽も二刀流です。教材研究のために毎朝必ず新聞を斜め読みし、夜に熟読します。一方でビジネス書関連の情報も見て、仕事術も学んでいます。人生も折り返してきたので、生き方を磨くために著名人の生き方に触れるようにしています。趣味は音楽鑑賞と楽器演奏ですが、健康を保つためにジョギングを始め、日々５キロ以上走っています。感性を磨き、感化できる教師を目指していきたいです。

「心にひびく言葉」

「児童・生徒に寄り添う言葉がけ」

駄知小学校　教頭　石山　文香

東濃地方の山間で育った私は、中学校時代にソフトボール部に所属していました。しかし、春には陸上部、冬にはスケート部にといった季節部活動にも参加していました。当時体育の先生はベテランのＳ先生。Ｓ先生は、生徒についてよく指導してくださいました。2 年の春、１００m走と走り高跳びの種目で大会に出場することになりました。走り高跳びは、体育の授業や普段の練習時は自分の記録が跳べても、大会の練習や大会の直前となると、普段の力が出せない私でした。Ｓ先生は、当時の私のそんな様子を見て、「地を見よ。天を見よ。バーは低い！」とおっしゃいました。短距離走は、時間との戦いですが、走り高跳びは、「バー」という制限があります。その制限に対して、『平常心』を保つことが自分にとっては困難でした。その後、先生にかけていただいた言葉を胸に練習に臨み、心の支えにしながら、大会に参加しました。

その後、社会人となり陸上の大会に出場することがあり、やはりこの言葉を思い出し競技を行いました。そして、それ以降陸上以外の場面でも、度々その言葉を思い出しています。

今、学校でたくさんの児童に接しています。出会った時の児童の表情はどうなのか。教室での様子はどうなのか。その子その子にどういった言葉をかけていくか。教師の何気ない一言が心を支えることがあります。恩師Ｓ先生を思い出しながら、一人一人に心して言葉がけをしていきたいと日々考え、実践しています。

◇土岐市教育実践論文　入賞者

今年度は３１点の応募があり、審査会で下記のように入賞者が決まりました。

《優秀賞》江﨑　大三（西陵中）「自ら主題を生み出す生徒の育成」〈美術〉
内海　裕樹（肥田小）「仲間とともに　よりよい自分を求め続ける子～算数科の授業改善を中心にしたよりよい人間関係づくり～」（学級経営）

《優良賞》道下　直矢（駄知小）〈学級経営〉　虎山　泰昌（駄知中）〈数学〉
水野　剛（泉中）〈数学〉　小池　智明（泉中）〈美術〉

《新人賞》八槇　匠（土岐津小）〈国語〉　杉本　繁征（土岐津小）〈社会〉
藤滝　雄申（泉小）〈特別活動〉　土方　冴香（駄知中）〈英語〉

《入　選》樋口　絵璃奈（土岐津小）〈学級経営〉　吉村　海人（駄知小）〈学級経営〉
田口　奈典（泉小）〈算数〉　加藤　聡恵（泉小）〈算数〉
鈴村　友浩（泉小）〈学級経営〉　横山　匠（泉中）〈英語〉

◇岐阜県ふるさと教育表彰受賞校

《優秀賞》濃南中学校　肥田中学校　《奨励賞》妻木小学校